

総武高校の養護教諭

生きた屍

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

総武高校の養護教諭の話。

勢いで書いた。

※タイトル変えました。

保健室の先生は保険医ではなく、養護教諭でしたね。

目次

総武高校の養護教諭

1

総武高校の養護教諭

「はあ……」

「どうした比企谷君。悩ましげにため息を吐いたりして」

千葉市立総武高校。

その保健室で、腐った眼をした高校生、比企谷八幡と、養護教諭、檜川修二が話していた。

室内は保健室特有の薬品の匂いが少し感じられた。

内装はどうということはない、どこにでもある保健室である。

怪我人のための絆創膏や、体調不良を訴えた生徒のための薬。

そしてベッドが二つ。

その保健室の中で、椅子に座る先生と生徒。

時刻は既に夕刻、放課後になっていた。

「今日は本当に厄日っすよ」

比企谷はもう一度息を吐いた。

檜川は意味が分からず首をかしげる。

「一体どうしたんだい？ 君のことだ、友人ができない、なんてことでそこまで落ち込んでいるわけではないだろう」

「……檜川先生は俺が部活に入ったって言ったたらどう思います？」

比企谷は檜川から目をそらし、そう言った。

窓から射しこむ夕陽で、比企谷の顔が照らされていた。

檜川は少し考えると。

「別にいいんじゃないか？ まあ、君らしくはないと思うが」

「ですよー」

比企谷は肩を落とした。

脱力したようだ。

檜川は言葉が続ける。

「それで、何の部活に入ったんだい？ 君とは他の生徒よりも話すことが多くてね。気になるところだ」

そう檜川が言うと、比企谷は複雑な顔をしてこう言った。

「……奉仕部っす」

「……奉仕部？」

檜川は何かを思い出すように目線を上げると。

——確か平塚先生が言っていたような。

「ああ、確か雪ノ下君が部長を務めていたね」

「あいつのこと知ってるんですか？」

「成績のいい生徒のことは、何をしなくても耳にはいるものさ。ここに来る生徒が言っていたこともある。……いい噂だけではないがね」

檜川は顔をしかめる。

比企谷も同様に顔をしかめた。

何か、思うところがあるらしい。

「根本的な疑問なんだが……なぜ君が奉仕部に？ 雪ノ下君と親しいわけではないだろうに」

「半ば強引にですよ。平塚先生に。君の発言は私を傷つけた、とか言われて」

「……はあ。あの人は本当に……」

「え、あの先生いつもあの感じなんですか？」

檜川は首を縦に振る。

どちらも口を開かず、静かな時間が流れた。

夕陽が、二人の顔を照らしていた。

そして、二人同時に息を吐く。

「……今日はもう帰ります。いろいろ疲れたんで」

「ああ、気を付けて帰るように。事故に遭わないようにね」

「あれは犬が悪いんですよ」

「君が何も考えずに行つたのも、偉いことだとは思うが、危険ことには変わりないよ」
「……へいへい」

比企谷は扉を開け出ていった。

その後ろ姿は、確かに疲れを感じさせるものだった。

「何か、癒しアイテムでも買ってみたいよか」

檜川は誰もいなくなった保健室を見回して、そう呟いた。

保健室と言うのは味気なくていけない、と。

そして檜川は自分の椅子と、比企谷が座っていた椅子を定位置に戻した。

カーテンを閉める。

今から保健室に来る生徒は少ない。

あとは書類を纏める作業をするだけだ。

檜川は保健室に置かれている教師用の机に向かい、今日診た生徒たちの情報と、今日話した生徒の話を書いておく。

彼の楽しみは先ほどのように生徒と話すことだった。

彼の個人のノートには、今までに話した生徒たちのことがたくさん書かれている。それらを書き終えたころには、もう外は暗くなっていた。

檜川はもうここを使う生徒はいないだろう、と閉めようと出入り口に向かうと、誰かが扉を開いた。

「檜川は居るか？」

「……君か」

入って来たのは平塚静。

長い黒髪に、スーツの上に白衣と言う服装をしている。

国語の教師にして生活指導担当である。

それを思い出して、比企谷に行ったのは生活指導と言うことだろうか、と考えた。

「何のようだい？」

「うむ。何と奉仕部に新入部員が入ることになってな。それを自慢しに来たんだ」

「何で僕に……」

檜川はそう言いながら保健室の奥に戻っていく。

平塚はそのあとに続いた。

そして、先ほどの檜川と比企谷のように椅子に座った。

すると徐に平塚は胸ポケットから煙草を取り出した。

「保健室で煙草はさすがにやめてもらいたいんだがね」

「むう……分かったよ。その代り仕事終わりにラーメンでも食べに行くぞ」

「……好きにしてくれ」

何が代わりなのかわからない平塚の発言に呆れながらも、檜川は了承する。

それを聞いてから、平塚はまた話し始めた。

「先ほど新入部員が入ったといったな、あれは君も知る生徒なんだ」

「知ってるよ。比企谷君だろう?」

先回りして檜川が答えを当てると、平塚はつまらなそうに眉をしかめた。

「ちっ、つまらない奴だ」

「それは悪かったね。自分でもわかってるさ」

檜川は息を吐く。

これが二人にとってのいつも通りである。

「まあいい。私が言いたいのはそれだけだ」

「じゃあ、僕は保健室を閉めるから出て行ってくれるかい? 君も仕事があるだろう、終

わつたらメールでもしてくれ」

「うむ。忘れて一人で帰るなよ」

「はいはい」

平塚はそう言つて保健室を出ていく。心なしか、先ほどよりも楽しそうだ。檜川は軽く室内を掃除し、鍵を閉めた。

——とあるラーメン屋。

その中に、檜川修二と平塚静は居た。

今現在、席が空いてないため、店の隅で待っていた。

店内はラーメンの熱気と、多くの客の熱気によつて大分熱くなっている。

少し経つてから、二人は空いたカウンター席に通され、お冷を出された。

平塚はメニューも見ずに注文した。

「味噌ラーメン一つ」

「じゃあ僕も」

つられて檜川も頼んだ。

と言つても何でもいいわけではない。

ただ、平塚が頼んだものが不味いわけがないからだ。

ラーメンについては、檜川は平塚に絶対の信頼を置いていた。

「なんだ、私と一緒にいいの？」

「君のことは信頼しているからね」

「う、うむ」

平塚は熱気のためか、少し頬を赤くして答えた。

檜川は水を一口飲むと、平塚に比企谷について話した。

「平塚、比企谷君を無理やり入部させるっていうのは、あまりいいことじゃないよ」

「なんだ、藪から棒に」

平塚も、一口水を飲む。

「比企谷君が言っていたんだよ。半ば強引に入部させられた、って」

「ちつ、比企谷め……まあ、私は生活指導担当でもある。あれは私なりに比企谷を更生さ

せようとしているのだよ」

「ちやつかり自分も楽しむんだらう？」

「ぐっ……」

檜川は苦笑する。

変わらないな、と。

そうやって話していると、注文したラーメンがやって来た。

——美味しそうだ。

味噌スープに細めの麺。

そしてもやしなどの野菜に大きなチャーシューが二枚乗っていた。

「これだけで足りるのかい？」

「……」

檜川は息を吐く。

「どうやら僕に遠慮しているようだ、と。」

「別に好きに食べてくれて構わないよ。遠慮するなんて君らしくない。お金が心配なら僕が出すよ」

「そ、そうか？ すいませーん！ 餃子一枚にチャーハン追加で！ あ、あとビールを！」

——思い切りがよすぎるのも、考え物だ。

檜川は財布の中身を気にしながら、ラーメンにがつく平塚を見るのだった。

余談だが、この後更にビールを追加で注文した。

店を出た後、酔った平塚を檜川が介抱することになったのだった。